

日常検査におけるフィブリン円柱および空胞変性円柱の出現背景 2

— 生化学検査値などとの比較 —

©橋本 綾¹⁾、田中 佳¹⁾、杉永 純一¹⁾、本間 秀一¹⁾、吉野 直美¹⁾、古市 賢吾²⁾、飯沼 由嗣³⁾
金沢医科大学病院 中央臨床検査部¹⁾、金沢医科大学 腎臓内科学²⁾、金沢医科大学 臨床感染症学³⁾

【目的】尿沈渣のフィブリン円柱(fibrin Cast,以下 fibC)や空胞変性円柱(空胞 C)は尿沈渣検査法 2010 でも明記され、多くの施設の日常検査で検出している。両円柱の出現は糖尿病性腎臓病(DKD)の何らかの病態(腎局所の過凝固など)を反映していると推測されているが、その臨床的意義については未だ不明な点も多く、臨床側の認知度も高いとは言えない。今回両円柱の出現と生化学検査項目等を比較検討したので報告する。

【方法】当院の尿沈渣検査で fibC または空胞 C を検出した 188 検体(成人 90 例)のうち、fibC のみ : A 群(116 検体)、両円柱 : B 群(22 検体)、空胞 C のみ : C 群(50 検体)の 3 群に分けた。尿沈渣検査日の前後 5 日以内の生化学検査値の内、尿沈渣検査日に最も近い生化学検査データを検査値とし、比較した。また、対象となった 90 例について糖尿病の有無などの臨床背景についても検討した。

【結果】3 群間の比較において BUN の平均値(A 群 : 40.1、B 群 : 52.2、C 群 : 50.2mg/dL)および eGFR(27.6、14.3、18.1mL/min/1.73²)に差を認めた($p < 0.01$)。各群間の比較では

A-B 群、A-C 群間に有意差を認めた。一方で TP(6.2、6.1、6.0g/dL)、Alb(3.1、3.1、3.0g/dL)、年齢(72.4、68.2、70.3 歳)、糖尿病を持つ割合(67.2、81.8、78.0%)、男性の割合(72.4、77.3、72.0%)には有意差を認めなかった。

【考察】fibC のみの出現群は空胞 C 出現群に比較してより腎機能が保持されていた。fibC が変性等を起し空胞 C へ移行することを示唆した我々の先行報告を支持する結果と考える。一方、本検討では 90 症例中 27 例、188 検体中 53 検体に糖尿病の診断を認めなかった。特に fibC のみの出現群では DKD 以外の膜性腎症、腎硬化症、紫斑病性腎炎、チロシンキナーゼ阻害薬の副作用など多種類の疾患背景がみられた。今後 DKD 以外の fibC 出現患者に着目することでより明確な臨床的意義が確立されることを期待したい。

【結語】fibC のみの出現群は、空胞 C 出現群に比較してより腎機能が保持されていることが示された。両円柱の出現意義を明らかにするためには、出現パターンや背景疾患を含めてさらなる検討が必要である。
連絡先 : 076-286-3511 (内線 24245)